

初級総合日本語学習者のための e ラーニング学習支援リソースの開発 ー日本語学習支援コンテンツのプロトタイプ構築ー

梅田 千砂子

アブストラクト

日本語学習者を取り巻く学習環境は大きく変化しつつあり、ICT (Information and Communication Technology: 情報通信技術) によって、豊かな学習環境を創出する可能性が与えられている。日本語学習者向けの教材もネット上で公開され、国内外の教師が共有することができるようになった。APU の初級総合日本語プログラムでも、学習管理システムコース、Blackboard やホームページを利用し、能力試験を実施したり、事前教育、正規の授業を補完するためのデジタル教材や CAI による練習問題を提供しており、自動採点や結果の保存ができることによって、学習者の学習支援と教師の授業支援が可能となった。しかし、これまでのこうした取り組みは、自習課題や教室活動の一部にとどまり、十分な学習効果をあげているとは言い難い。本稿では、APU が使用している教育支援システム Blackboard を活用し、世界各国から集まる多様な背景を持った学習者が初めて日本語を学ぶ環境にふさわしい e ラーニング学習支援コンテンツについて考察し、プロトタイプを提案する。

キーワード: 学習環境、初級総合日本語、日本語学習支援、学習者の多様化、e ラーニング

1. はじめに

APU では毎年、400 人を超える多国籍の留学生を受け入れているが、日英二言語教育システムの下に、初年次には、ほとんどの学生は英語で講義科目を受講しながら、初めて日本語を学ぶ。日本語カリキュラムでは、ゼロ日本語学習者が日本語の基礎を学び、身近な生活に必要な日本語力を養うことを目的としたコースを必修とし、日本語で専門講義を受けたり、就職に必要な高い日本語力を身につけたい人のためのコースを選択科目として設定している。実際、2011 年秋学期に必修を終了した 80% を超える学習者は日本語学習を継続しており、この高い数値は、さらに日本語力を高めたいという意欲のある学生が多いことを示している。しかし、英語で専門講義を受け、キャンパスでは英語か母国語を使用している学習者は教室の外で日本語を使う機会が少なく、日本に居ながらにして、日本語を使う環境の中で生活する学習者と比べると、より日本語習得に時間を必要とする。特に、初めて日本語を学ぶ学習者にとって、異文化の中で新しい言語を学ぶには、時間を要し、十分な説明や情報、練習が必要である。そのためには、一人一人の学生が学べる環境やリソースを提供することが重要であり、限られた時間の中で、自分のペースで学習が進められる e ラーニング¹ のような学習支援システムが不可欠だと考える。

これまでも、本学の初級総合日本語学習者のために、学習者のニーズに即した教科書を作成し、それを補完するものとして、ホームページや、Blackboard を利用しスキットのビデオや聴解練習、文法練習のためのデジタル教材を提供してきたが、初級学習者の日本語習得を促進し、より学習効果をあげるためには学習者中心の学習支援コンテンツを開発することが重要である。

2. 自律学習と社会参加の言語教育

日本に住む留学生にとって、日本語は生活するために不可欠なコミュニケーションツールである。学習者は知識を受け取るだけではなく、社会で日本語を使って自分自身を表現し、他者との相互行為を通して、自分の言語行動を振り返ったり、相手を理解するために質問を投げかけたりしながら、自らの成功と失敗を通して学んでいる。日本語教育にも

¹ ここでは、菅原(2010:59)を引用し、e ラーニングを「デジタル化された教材とアプリケーションソフトウェアを使いながら、コンピューターを利用して学習をすすめる方法」と定義する。

学習者が教室の外で自主的に学習を続け、社会に参加できるような活動を導入することが重要だと考える。

従来の日本語教育の現場では、狭義の言語を学び習得することに焦点がおかれ、「その言葉を使って何がしたいのか」、「1人の日本語話者としてどんなことができるのか」といったことを学習者が模索できるような環境を作ることにはあまり注意が払われてこなかった。何のために学習者が日本語を学ぶかという程度の差こそあれ日本語を使って社会と関わるという目的がある。言語教室ではともすれば言語的な要素だけを取り出して練習を行い、その習得に焦点が偏りがちである。もちろん、言語要素の習得が大切であることは疑いの余地はないが、社会参加する際の実際のコミュニケーションにおいては欠かせないスピーチやチャット、メールなど文脈に最も適したコミュニケーションスタイルの使い方や、発話して意思の疎通を果たし、会話に参加することや、依頼、情報入手、謝罪、自己紹介といった様々な行為ができるまで指導することが重要である。さらに、教室外に必要な自分の目的のために自分の言葉で他者に働きかける力を伸ばすためには、教師が教えたものを学習者が学ぶという一方的な学習ではなく学習者が積極的に学習に関わり合い、様々な学習リソースを活用して学んでいこうとする態度、つまり学習者の主体性や自律性を養うことも大切である。そのためには、知識を与えそれを確認することと学習者の能動性、創造性を伸ばすような活動をバランスよく取り入れることが必要であり、活動の目的や意味を明確にし、いかに社会文化的実践として意味をなすような活動にするかという視点が教室の実践に求められている。佐藤他 (2011b : viii-xi)は社会参加を目指す活動の留意点について次のように述べている。

1) 内容を重視する活動

言葉を学習すると同時にその言葉を使って様々な内容、トピックやテーマについて学習できるような活動を取り入れる。「言語の学習」「内容の学習」といった二項対立的な考え方を乗り越え、両者を包括的に統合した言語教育である。

2) 学習者個人の興味を尊重する活動

個人プロジェクトやグループプロジェクトのようにトピックや内容に柔軟性がある活動をカリキュラムに組み込み、学習者が自分の興味のあることについて調べ、それについて自分の意見や考えを他者へと発信し共有していけるような場を設定する。

3) 多様性を理解する活動

社会は多様な価値観、考え方、意見をもった人々から成り立っている。自分と異なる相手を理解し、自分のことを理解してもらえるのか、共に協力しあってどう社会づくりのために行動していくことができるのかといった問いについて考えることを奨励し、能動的で有意義な社会参加をし、多様性を理解し重視する。

4) 文脈を重視する活動

日常的に狭義「言語」だけでなく様々な要素(顔の表情、身振り手振り、声の大きさや調子、文字の色やフォントの大きさ、スペースなど)を駆使してコミュニケーションを行っている。文脈に最も適したコミュニケーションスタイルやその他の要素の使い方を考え模索していくことが重要である。

5) 学習者の自己実現を支援する活動

教師や教室活動というのは学習者が自分自身の目的を達成するための支援をするにすぎない。教師の手助けなしに自主的に学習を続け社会に参加していけるような指導が必要である。不慣れな状況の中でも積極的にコミュニケーションを行い、自らの成功と失敗を通して学んでいくことができるような学習者を育てることが大切である。自己実現が他者の存在なしではありえないということを前提とし、自己実現を目指す学習はそれを可能にするための社会のとの関わり、つまり、社会への参加が必要である。

(佐藤慎司他『社会参加をめざす日本語教育 社会に関わる、つなぐ、働きかける』2011. viii-xi ページ)

言語習得に成功した人々の共通点は、教室場面で学習したことを応用し、身近にある生のメディアリソースにアクセ

スし、それを活用しながら自分で学習していることである。「自分にあった自律学習を身につけ、自分の学習を自分で管理することが肝要である」と吉田(2008c: 18)は付言している。

このように言語学習を実社会と結び付け、自律した学習者を育てるためには、初級の段階で、学習したことを使って「何ができるようになるのか」という目標を設定し、早い段階から学習者に実際に使うことを意識させることが重要である。教師はそれを達成するために、予習、授業中に行われる練習や活動、その効果をさらに高めるための宿題、評価、振り返りというステップを準備し、各段階で適切なサポートを考えることが必要である。さらに、サポートの一環として、ICT を利用することで、いつでも、どこでも、自分のペースで学習ができるリソースと環境を提供することが可能となる。

3. 本学における初級総合日本語教育

本学では、ゼロ日本語学習者に対して、二学期間をかけて中級レベルまでの日本語学習を必修とし、学習者のニーズに合わせて開発された教科書を中心に授業の中身が組み立てられている。

3.1 初級総合日本語の授業の概要

コースは毎年（前期と後期と合わせ）約 400 人の留学生が日本語を受講し、中国、韓国をはじめ約 25 ケ国の国別の学生が学習している。1 クラス 25 人で構成されており、多様な文化背景を持ち学習スタイルが異なる学生が混在している。教科書は本学の留学生が日常生活で必要とされる 20 の場面をとりあげ、それをパート 1 とパート 2 に分け、各パートは場面を中心とした 10 のトピックで構成されている。それぞれのトピックは、コミュニケーションスキルを養うことを目的とし、スキット、新出言語リスト（英訳付）、文法（説明、例文、練習問題－理解と産出）、漢字（書き方、読み方、練習問題－理解、産出）情報と繰り返し練習、スキル練習（話す、聞く、読む、書く）と文化情報で構成されている。

ねらい このコースは身近な生活の場面で必要とされる日本語を使って用が足せるようになることを目指し、日本語の基礎を養うことを目的とする。

学習期間 15 週間 270 時間、週 4 日、1 日 3 コマ（1 コマ 95 分）

主教材 教科書²

『日本語 5 つのとびら 初級編 1』 + ビデオ、聴解

『日本語 5 つのとびら 初級編 2』 + ビデオ、聴解

具体的なレッスンの例 トピック 12 「旅行します」

目標³ 各トピックに CEFR (Common European Framework of Reference for Language Learning, Teaching, Assessment) を基にした国際交流基金の JF 日本語教育スタンダードを参考にして、本プログラムに合わせた Can-do Statements を作成し、何ができるようになるかの行動目標を設定している。

² 梅田千砂子他 『日本語 5 つのとびら 初級 1』凡人社 (2009)

梅田千砂子他 『日本語 5 つのとびら 初級 2』凡人社 (2010)

³ 資料 1、2 参照。『JF 日本語教育スタンダード』<http://jfstandard.jp/portfolio/ja/render.do>

授業と活動

表ー1 授業の流れと活動

予習 (宿題)	①目標の確認 ②語彙を聞いて、意味の確認をする(音声はWeb上で)。
対面授業 (4コマ)	①宿題の語彙練習の答えをチェックする。 ②文法説明とパターン練習、応用練習
復習 (宿題)	Blackboardの文法、聴解練習
対面授業 (3コマ)	①会話練習 ビデオのスキットを見ながら練習する(Web上で)、ロールプレイ、グループワーク(好きな旅行の場所を決める)。 ②漢字練習 教科書を中心とした読み書きの練習→応用(生教材の使用:航空券の申し込み書に記入)。 ③読解練習 簡単な旅程を理解する。 ④書く練習 友人にeメールで旅程を知らせる。
対面授業 (1コマ)	応用練習 グループで旅行したい場所をインターネットで調べ、発表する。
評価 (2コマ)	①会話チェック ②クイズ(文法、聴解、読解、漢字語彙) ③目標達成度の自己評価(Blackboard)

3.2 問題点

上記のような内容で授業が進められているが、学習者と教師から次のような問題点が指摘された。

学生

- ・学習総時間数の制約。
- ・語彙が多すぎて覚えられない。
- ・教科書の文法説明がわかり辛い。
- ・学んだことを実際に使うことができない。
- ・教科書で学ぶ日本語と実際の日本語の乖離。
- ・教師による教え方の違いによる混乱。説明がわかりにくい時がある。
- ・紙媒体の復習シートや練習問題が多く、整理できない。
- ・漢字が覚えられない(非漢字圏の学生)。
- ・聴解が難しい。

教師

- ・学習総時間数の制約。
- ・学習者の学習能力の差。
- ・学習者が日本語を外で使用していない。
- ・パワーポイントなどの作成に時間がかかる。
- ・成果(パフォーマンス)を蓄積し、履歴を振り返る場所がない。
- ・紙媒体の練習問題作成や採点に時間がかかる。
- ・個別指導に時間を要する。

4. 学習支援リソース

4.1 言語学習のためのBlackboardの活用

上記の問題点を改善し、社会参加を目指した日本語学習の目標を達成するためには、学習者中心で、学生の多様なニーズに応えることができる学習リソースを考えることが重要である。それには、学習者が個人のペースで、いつでも、どこでもやりたい時に勉強でき、理解を促進するためにビデオや音声で実際に使用されている場面を提供し、言語練習の自動採点や学習履歴の蓄積などが可能なシステムの利用が望まれる。本学にはすでにインターネット上にコースを置くLMS (Learning Management System)⁴、Blackboard が導入されているが、これを有効活用することによって、さまざまな学習ニーズを持つ学習者に対応することができる。このシステムは、登録されたユーザーが利用できる教材や資源、あるいは活動を保存するための構造化されたデータベースであり、協調的な学習環境になるように設計されており、クラスの学生の参加が重視されている。考えを共有したり、1つの話題について意見交換したりする場所として「掲示板」があり、教科書の内容を補足したり、練習の機会を与えるような他の教授事象がWeb上で公開されている(R. M. ガニエ他 2007:392)。これまでも表-1に示すとおりBlackboardを利用し、言語学習のための文法、聴解の練習問題やオンライン上のビデオや音声にアクセスし、いつでも、どこでも練習ができるデジタル教材を提供してきた。何度も繰り返し練習することができ、自動的に採点され学習履歴が蓄積されることによって、教師の採点の負担が軽減された。短期間に更新したり修正したりすることができることによって練習問題の改善も容易になった。しかし、これまでの開発では、これらのデジタル教材は教師によってコントロールされた言葉の知識を学ぶための練習問題であり、実際の場面で使用されている日本語のやりとりや、学習者の実社会における体験や興味を基にした視点が活かされていない。

4.2 学習者のニーズ

これまで、日本語学習を支援する優れたデジタル教材や日本語学習支援システムが公開されている⁵。徳永(2008a:183)は、24の日本語学習支援サイトを紹介し、その中には学習者だけではなく、教師や授業を支援するためのものもあり、登録したメンバーがお互いにアイデアを交換したり、教材をダウンロードすることによって授業へのヒントを得ることができることや、メーリングリストやブログ、掲示板による双方向での情報発信も可能であることを指摘している。しかし、これらの教材やシステムは、本学で学ぶ学習者の目標や活動の一部を支援するだけにすぎない。本学の学生に相応しい学習支援システムを構築するためには、学習者のニーズ、活動、そして教育的文脈に合わせた設計が必要である。Quintana 他 (2009:99) は学習支援システムを設計する際には、内容についての有効性だけではなく、学習者についても考慮すべきであると述べ、以下の指摘をしている。

- ・学習者は活動や実践を通して学習不足を補い、理解を促してくれるツールを必要としている。
- ・学習者は知識や文化を共有していないので、学習スタイルや性格に個人差がある。そのため背景、発達、性別、年齢、学習スタイルを考慮する。
- ・学習者は新しい内容を学習したりするための高い動機付けを常にもっているとは限らないし、新しい概念や活動の理解につまずくと動機は弱まる。従って難しく新しい課題にも継続して学習を進めていけるように学習者を動機づける必要がある。
- ・学習の目的は新たな理解を獲得することであるため、理解を発展させるための変化を引き起こすデザインが必要である。

⁴ LMS (Learning Management System)とはeラーニングを実施する際に、学習者の個人情報や進捗、コースの履修状況、教材などを管理するシステムである。学習用の様々なモジュールから成り立っており、同期・非同期型のコミュニケーション手段、テキスト・画像・ビデオなどの素材を提供することが出来、インターネット上のリソースにリンクを張ることも出来る。練習問題機能もあり、学習者の利用履歴も追跡することが可能である。(境 2008b:146)

⁵ 国際交流基金日本語国際センター『エリンが挑戦! にほんごできます。』<https://www.erin.ne.jp/jp/>
日本語読解学習支援システム『リーディング チュウ太』<http://language.tiu.ac.jp/>

(Quintana 他「学習者中心のデザイン」『学習科学ハンドブック』培風館 2009.99 ページ)

5. 日本語学習支援コンテンツのプロトタイプ

日本語学習の目的や、これまでの先行研究を踏まえ、本学の初級総合日本語教育の目標、学習者のニーズに対応した学習支援を行うために、次のような学習支援コンテンツの設計が考えられる。

- ・ 正規授業を補完し、自学自習を促進するリソースとして、コンテンツにはマルチメディアを利用し、教師の説明や、先輩、ピアによる学習方法のアドバイス、文化情報、実際に使用されている場面を提供することによって理解の促進が期待でき、学習成果として発表記録や作文などが共有できる。
- ・ 携帯電話・PDA 等が利用でき、学習したいコンテンツをダウンロードすることによってリスニングとリーディングが可能となる。
- ・ 英語や学習者の母語による説明を付け、理解の補助ができるようにする。

言語学習サポート

<スキット>

- ・ 各課のスキットをビデオで公開する。

<教師の説明>

- ・ 各課の授業の一部をビデオで公開する。

<漢字・語彙・文法練習・聴解>

- ・ 多肢選択問題や穴埋めによる練習問題を繰り返してできるようにする。

<大切な表現>

- ・ イラストや写真などを利用し、わかりやすく文型の説明をする。

<使いましょう>

- ・ 学習したことが使用されている場面を動画で公開する。

学習サポート

<ピアによる情報提供>

- ・ 学習したことが実際に使用されている場面や興味あるシーンを写真に撮り共有する。

<ピアによる成果発表>

- ・ 各課の活動の成果やプレゼンテーションをビデオに収録し公開する。

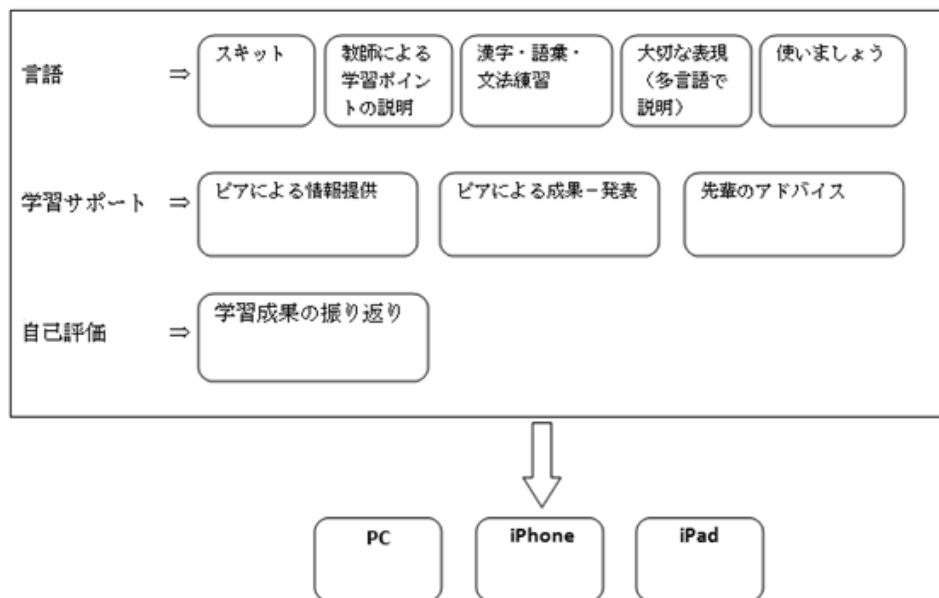
<先輩によるアドバイス>

- ・ 多国籍の先輩が英語と母語で日本語学習方法についてアドバイスをする。

自己評価

- ・ 学習者のパフォーマンスをビデオに収録し、それを保存し成果を振り返り、気付きを促す。

図 1-1 学習支援コンテンツ



6. 課題

このような学習支援システムを開発するためにはいくつかの問題を改善しなければならない。まず、開発にかかる時間、予算、マンパワーが十分ではない。また、教師のテクノロジーを用いた学習支援についての知識が十分ではない。さらに、開発された学習リソースによって学習者が効果的かつ効率的に学習目標を達成できたかを検証するための評価法が確立していない。これらの問題を解決するためには、学内のIT専門家や技術者によるサポート体制を構築し、教師の学習を支援する環境整備が急務である。コンテンツの提供方法（アニメーション提示方法・マルチメディアの利用方法など）及び学習効果（充実性、勉強意欲、継続性、学習の楽しさなど）の評価法をシステムに組み入れることによってリソースの学習効果を判断し改善することが必要である。

7. おわりに

本稿では、本学の初級総合日本語学習者を対象とした学習支援システム開発のために、学習支援コンテンツのプロトタイプを提案した。学習環境には人（教師、学習者）、物、コンピューターとその役割、社会的・文化的環境が含まれる。よりよい学習を促進するためには、学習への動機付けを高め、深い学習を促進するための支援が提供されなければならない。このような支援を足場かけ(scaffolding)と呼び、Sawyer (2009:9)は、これを次のように説明している。「学習者が目標を達成しようとする際に必要とするものを与えられる支援である。効果的な足場かけとは、学習者が学ぶ対象を自分で理解する助けとなるようなきっかけやヒントを与えることにほかならない。つまり、効果的な学習環境とは足場が建物の建築を支援するような方法で学習者の能動的な知識構築を援助することである。」今後、学習者のニーズに応じて、足場かけを追加したり、修正したり、取り除いたりしながら、最終的には完全に足場を必要としなくなるような学習環境のデザインを目指し、教育効果を高めていきたい。

引用文献

佐藤慎司他(2011b)『社会参加をめざす日本語教育 社会に関わる、つなぐ、働きかける』ひつじ書房

- 境 一三(2008b)「豊かな学びの場としてのLMS」『ICTを活用した外国語教育』東京電機大学出版局
- 菅原 良(2010)『eラーニングと学びの理論』一粒書房
- 徳永あかね(2008a)「日本語教育とICT」『ICTを活用した外国語教育』東京電機大学出版局
- 深井美由紀他(2011a)「ペダゴジーのポリティックスと学習者の能動性、創造性：カタカナ・プロジェクト分析」『社会参加をめざす日本語教育 社会に関わる、つなぐ、働きかける』ひつじ書房
- Quintana, C., Nomsoo, S., Norri, C., & Soloway, E (2009)「学習者中心のデザイン 過去への省察と未来への方向づけ」『学習科学ハンドブック』培風館
- Sawyer, R. K (2009)「イントロダクション 新しい学習科学」『学習科学ハンドブック』培風館
- R. M. ガニエ他(2007)『インストラクショナルデザインの原理』北大路書房
- 吉田晴世(2008c)「外国語教育・学習モデル」『ICTを活用した外国語教育』東京電機大学出版局

参考文献

- 池田伸子(2010)「ブレンディッドラーニング環境におけるeラーニングシステム利用の効果に関する研究－立教大学初級日本語コースを事例として－」『ことば・文化・コミュニケーション』2号
- 加藤由香里(2008)『日本語eラーニング教材設計モデルの基礎研究』ひつじ書房
- 川村よし子(1999)「インターネットを用いた日本語の学習支援システムの構築」『情報教育方法研究』49-54 第2巻 第1号
- 水町伊佐男(2006)『コンピューターが支援する日本語の学習と教育』溪水社
- 山内祐平編(2010)『デジタル教材の教育学』東京大学出版

資料1 教師用 Can-Do statement

コミュニケーション活動	理解	聞く	12-L-1 学習した語彙や表現を使ってゆっくり、はっきり話されれば、旅程や乗り物の切符、ホテルの予約、値段についての簡単な質問や説明を理解することができる。
		読む	12-R-1 学習した語彙や表現、文型を頼りに簡単な旅行パンフレットやインターネットから必要な情報を得ることができる。
	産出	やりとり	12-C-1 学習した語彙や表現を使って、母語の影響や言いよどみ、誤用はあるが、旅程を説明したり、切符やホテルの予約、変更について質問したり、答えたり、行きたい場所について説明したりすることができる。
		書く	12-W-1 ・学習した語彙や表現、単純な文法構造や構文を使い、限られたカタカナや漢字を用いて、旅程や観光したい場所について説明することができる。 ・簡単なメールを書くことができる。
方略		12-H-1 わからないときに聞き返したり、ゆっくり話してもらったり、言い直したりしながら、コミュニケーションを続けることができる。	
テキスト			12-T-1 短いテキストのキーワード、表現、短い文を抜きだし、書いたり線を引いたりして重要な部分を把握することができる。

コミュニケーション言語能力	言語構造能力	語彙	12-V-1 旅行に関連した言葉や尊敬語の意味を理解し、使うことができる。
		文法	教科書トピック 12 参照。
		音素	12-P-1 特殊拍やイントネーションの問題、母語の影響もあるが、言いなおしながら産出することができる。
		正書	12-H-1 文字の形に問題はあるが、限られたカタカナ、漢字混じりの文を句読点を用いて書くことができる。
	社会言語能力・文化	12-SC-1 <ul style="list-style-type: none"> ・日本の地理や観光地について知る。 ・待遇表現（尊敬語）についての基礎知識を身につける。 	
語用能力	12-D-1 <ul style="list-style-type: none"> ・旅行社の窓口で話しかけ、乗り物の切符やホテルの予約、変更をし、会話を終了することができる。 ・インフォーマルな場面やメールで、友だちと行先や日程についての情報交換をすることができる。 		

資料2 学生用 Can-Do statement

Topic	Skills	Can do
12	Reading	To be able to understand a tour itinerary or a necessary information from a simple written tourist guide.
	Listening	To be able to understand the information about making or changing reservation for a transportation ticket and hotel in a travel agent if an office clerk speaks slowly and articulately.
	Speaking	To be able to explain a travel schedule and make or change a reservation for a hotel and transportation in simple and understandable way.
	Writing	To be able to write a travel schedule and experiences about a trip using limited vocabulary and control of simple grammatical structures, sentence patterns, Katakana and Kanji which they learned.